平成３０年度秋田県総合政策審議会
第３回 人・もの交流拡大部会
議事要旨

１　日時　　平成３０年８月２９日（水）１３：３０～１５：３０

２　場所　　総庁６０７・６０８会議室

３　出席者（敬称略）

【人・もの交流拡大部会委員】

佐野　元彦・・・・秋田ノーザンハピネッツ株式会社　代表取締役会長
関口　久美子・・・株式会社トースト　常務取締役
渡邊　竜一・・・・株式会社アジア・メディアプロモーション　代表取締役

【県】

観光文化スポーツ部　次長　嘉藤　正和
次長　恵比原　史
インバウンド推進統括監　益子　和秀
参事　飯坂　尚登
各課課長　ほか

４　部会長あいさつ

今年の夏は、気候のことや甲子園での秋田県代表校の活躍などで、秋田県が全国から注目を集めている。

前回の部会や審議会ではいろいろな意見が出され審議が行われた。本日の部会での議論を経て、本部会から提出する提言書を完成させる。来年度に向けていい取りまとめができるように、ご意見を頂戴したい。

５　議事

（１） 人・もの交流拡大部会から提出する提言の検討にいて

●渡邉部会長

それでは、「人・もの交流拡大部会」から提出する提言について事務局よりお願いする。

□石黒観光戦略課長

資料１、資料２により説明

●渡邉部会長

それでは、「提言１　秋田ならではの資源を生かした観光地づくりと誘客の推進」に

ついて検討していく。
　１回目の審議の内容がたくさん盛り込まれている。この提言書は情報発信のための強いコンテンツ作りと情報発信手段についての内容が中心となっている。追加や修正があれば発言いただきたい。

●関口委員
　提言１－３の表現について、留学生の「活用」という部分があるが、留学生の「取組を積極的に進める」という表現にした方が良いのではないか。
　次にペットツーリズム推進については、費用面の支援拡充が既に行われているようだが、まだまだ整備が進んでいない部分に対する対策が必要ではないか。犬や猫が嫌いな方がいる中でどのように取り組んでいくかが課題になっている。積極的にペットツーリズムに取り組んでいる施設と意見交換をして問題を解消していくことが必要であり、推進策を加筆すべきである。
　現在、本県は秋田犬で注目を浴びている。あらゆる「場、こと、もの」において、人だけでなく「人＋ペット」の視点で指針を作るべきである。
　８ページの「３」も、積極的に「活用」を、「参画を進め」と表現した方が良いのではないか。

●渡邉部会長
　私は昨日まで、仕事で岡山県に行き、ジオパークをテーマにした広域の観光周遊ルート作りのための町歩きをした。その時に、受け入れ先とガイドの大切さを感じた。観光客が来たときの受け皿とガイドラインがあるといいので、資料や指針を出すのが非常に大事である。
　それでは「提言２　新たな観点からの食品産業の振興ついて」に移る。
　ここでは、地域ブランドの確立に向けて付加価値をつけ、経済効果を生む話が中心になってくる。

●佐野委員
　「提言２　発酵食品等の新たな需要の獲得」の所では、調理方法のレシピ提供まで踏み込み、「こういった食べ方がありますよ」といった提案はできないか。県外在住の知人は、ペペロンチーノの隠し味に「しょっつる」を使用している例がある。このように、普段食べているメニューに発酵食品を少し足すとさらにおいしくなるといったレシピ提案はできないか。

●関口委員
　今年の夏にお客様から「しょっつる」に対するイメージを聞いたところ「しょっつる鍋」と回答する人が多く、幅広く料理に使えることを紹介すると驚かれる。今ではスプレータイプのものが開発されており、塩分調整を手軽にできると伝えると購入につながる。「しょっつる」のような伝統的なものを、現代の食卓で、日常で使ってもらえるた

めの提案が必要ではないか。商品にレシピ集を付けるとお客様が手にとってもらうために有効である。

今、私の経営するレストランでは、三重フェアをやっており、レストランで使っている三重の物産の情報とレシピを開示すると、お客様はその物産を買い、レシピにも関心を示す。このように、レシピなどの情報を載せることで、男性だけでなく女性にも手にとってもらえるきっかけになるので、日常的に使ってもらえる情報を加えることが大切である。さらに、県外でその食品や調味料を使用しているレストラン等を公表することで、実際に食べて気に入り、購入につながるという流れを作ることが必要ではないか。

●佐野委員

秋田県産食材を使ったレシピ専門のウェブサイトを立ち上げるのはどうか。全国の中で県産にこだわったレシピだけを集めたサイトは存在しないのではないか。関口委員が発言したように、さまざまなものを現代の食卓のこういった場面でも使えますよという提案が消費の拡大だけでなく、話題性にもつながる。ぜひ、ウェブサイトの構築を考えてもらいたい。

●渡邉部会長

今年度から「発酵ツーリズム」を事業として進めていると思うが、現状がどのようになっているのか教えて欲しい。

□大友うまいもの販売課長

発酵ツーリズムは、２９年度途中から開始した。フェイスブックを開設し、商品や見学できる施設を紹介している。観光、発酵食品、情報発信のワーキンググループを立ち上げた。発酵ツーリズムの拠点整備として、今年は、高清水（秋田酒類製造）、齋彌酒造、湯沢市のヤマモ味噌醤油醸造元の３カ所で施設改修等を進めている。

●渡邉部会長

ツーリズムの観点で話をすると、国内の類似する発酵食品の文化を比較して紹介すると面白いのではないか。先日、出張で食事をしていた時に、滋賀の方から「鮒ずし」について教えてもらったので、秋田にはハタハタ寿司があることを紹介し盛り上がった。発酵食品の文化が各地でどのように発達しているのかとても興味を引く内容だと思う。一方で、海外の旅行者にとっては、わからないものについて恐怖心を抱くかもしれないので、背景となることを伝えないと抵抗感を感じるはずである。しっかりとした食べ物のストーリーを伝えることで、興味を持ち、記憶に残るのではないか。

私は食の事業としてタイ料理をやっているのだが、「ナンプラー」と「しょっつる」の文化を伝えることが文化創造につながると考える。

●佐野委員

１の「知的財産の保護」の最後の２行にあるブランド化の推進について、秋の大型キ

ャンペーンガイドブックの１２ページのフルーツのコーナーに、なぜ三関のサクランボが掲載されていないのか。次に、１３ページのふくまつりのページについて、北限のふぐは八戸でものすごくキャンペーンをやっている。秋田と八戸だと、八戸の方が北にある。トラフグの産卵地の北限が秋田の沖であって、おそらく八戸のトラフグは回遊している。トラフグの北限の産卵地でとれた秋田のふぐという所を売っていかなければならない。ふぐはシニア世代の魅力的なコンテンツであるので、なぜ秋田のふぐを大々的に売り込まないのか。それこそ東京の料亭だと何万円のところが、「秋田に来ると、安い値段で食べられて、旅行できて大変お得ですよ」とＰＲしたらどうか。

□成田観光振興課長
　今回のガイドブックは、ＪＲの秋のキャンペーン期間に限定して紹介しているため掲載していないが、通年の観光パンフレットには掲載している。

●関口委員
　秋田県の大型観光キャンペーンガイドブックには、ＪＲ東日本と記載されているが、駅に設置するのか。
　情報の入り口をどこにするのかが重要になる。先ほどは、秋田の物産をどういう風に広げていくかという入り口の部分に関して、レシピやそれを使っている施設の紹介を付けるという話をした。佐野委員がおっしゃった秋田の物産のレシピ集を作るというのは、既に取組をしていたと記憶している。今の若い人は、情報はネットで集めることができるため、レシピの大手サイトであるクックパットとタッグを組むのはどうか。
　マネジメントを全国、世界に向けて、しかもアクセス数の高いところと組んでいく姿勢が必要である。そこから物産の購入につながるように連携をとってみてはどうか。

●渡邉部会長
　食のツーリズムを情報サイトに載せることで情報の入り口にする。
　提供する側と利用する側でブランド構築をしていきたい。キャッチコピーを作るだけではなく、利用者が利用したときにどのような約束をするかがブランド構築である。食のブランドは浸透するまで長い活動をしていかなければならない。
　そのための認証制度や著作権保護については、制度上しっかりと進めていただくことが大切だ。

●関口委員
　地理的表示保護制度（ＧＩ）についての話があったが、伝統野菜に対するＧＩは絶対に必要ではないか。とんぶりやじゅんさいは、本県の伝統野菜であるが、過熱した時点で加工品として扱われる。ＧＩについて情報を提供しつつ取得の促進に努めるべきである。海外に権利を取得されてしまっている事例が日本各地に存在するが、秋田は秋田で対策を講じていくことが必要ではないか。

●渡邉部会長
　ＧＩの所管はどこになっているか。

□大友秋田うまいもの販売課長
　窓口は、農林部の販売促進課になる。

●渡邉部会長
　京都は伝統野菜の観光プロモーションを行っており、とても人気がある。京野菜にはきちんと体系立てたストーリーがある。
　それでは、「提言３　民族文化の維持・継承と文化による交流人口の拡大」について議論する。
　前回の審議では、意見が少なかったので追加していきたいところである。

●佐野委員
　具体的な取り組み方策の一番下にある、「海外の富裕層には、祭りをつくり上げていく過程から参加する体験」とあるがこれは現実として成り立つのか疑問である。

●渡邉部会長
　私が提案した内容である。北海道で仕事をした際に、秋田の地域の祭りは歴史があって素晴らしいと言われたという背景がある。ハードルは高いと思うが、文化を伝承するため、観光交流の一つとしてつながってほしいと考える。

●佐野委員
　地域の歴史・文化・背景、ここが１つのポイントである。海外の人が心を動かされるのは、お祭り自体の動きや見た目のきれいさではなく、どういった背景に由来して、何百年にわたって、それぞれの地域で守り続けられてきているのかという物語の部分に心を動かされると考えているので、しっかり伝えることが重要である。どちらかというと、若い外国人に一緒につくり上げていく所を担ってほしい。国際教養大学に来ている学生は、そこにものすごく興味を持っていると考えている。もしかしたら、秋田に残って、地元の人たちとお祭りを承継していく活動をやりたいという外国人の学生たちが出てくるかもしれない。ポイントは歴史・文化・背景をしっかり伝えるということである。

●関口委員
　海外からの観光客が地域の祭りに参画することについて、祭りによってはできるものがある。上桧木内の紙風船上げの場合、紙風船に絵を描いてもらったり、横手のかまくらの場合には、実際にかまくらを作れる専用スペースを設けることもできるのではないか。何ができて何ができないのかという線引きから始めないといけない。
　祭りの維持・継承については、インバウンドの参画を求める前に、県外へ出て行った人へのアピールや取組が必要ではないか。人口が減っていく中で、祭りの維持・継承は

物理的に難しく、祭りが失われてしまうことが想定内される。これを埋めていくためには、県外へ出られた方に対する政策が必要である。遠くに住む若い人にこちらから出かけていく必要がある。例えば、首都圏でお祭り講座を開設したり、カルチャースクールに講座の開設を依頼するといったものがある。講座の中で各地の祭りの所作や歴史を学び、講座の最後には体験として実際に祭りに参加してもらい、現地の人々と交流を持つ、このような流れが必要なのではないか。講座でレクチャーをする地元の人々に対しては、経費を助成すれば良いのではないか。

また、企業のＣＳＲ（社会貢献）に対して、観光的なものも含めた社会貢献活動としての働きかけも必要ではないか。例えば、経団連の「１％クラブ」に参画へのアプローチをしていく。経常利益などの１％相当額以上を自主的に社会貢献活動に支出することを提案する活動である。そのためには、ＰＲの映像を作成する必要がある。

祭りの維持・継承の問題は、観光だけではなく農地の保全や、農地の多面的機能性にも関わるため、軽視する事案ではなく農水産部を含めた取組が必要である。

国に、伝統文化の維持・継承は大命題なのだという認識を持ってもらうため、伝統文化継承休暇といった環境整備への働きかけが必要である。人がいなければ、人がいるところから分散させるしかない。

また、教育と連携するのも良いのではないか。例えば、夏休みに地域の祭り研究をしたり、県内の大学において地域の祭り研究の同好会や部活動化を進めるといったものがある。今後、消滅していくお祭りが出てくるので、教育と連携して祭りの発祥、伝承、実際に祭りに至るまでを映像に記録することは絶対的に必要である。

●渡邉部会長

岡山は地域を守る取り組みを教育委員会が行っている。ジオパークなどは学術レベルが高くなると入り口が難しくなるため、教育との連携が必要だ。インバウンド客対象の体験型コンテンツでは、２時間を過ぎると楽しむことができないので、参加者のレベルに合わせるべきである。入り口となるような導入から段階を経て楽しんでもらえるようにしたい。徳島の阿波踊りなどの観覧型の祭りよりも、参加型の祭りの人気が高まっている。今週末に高橋優さんのフェスが開催されるが、それとあわせたツーリズムを体系的なものにできないか。

秋田のジオパークを整理してつなぎ合わせることでテーマ性を持ったツーリズムの在り方ができるかもしれない。ジオコンテンツを楽しむテーマの在り方としてテーマがしっかりしていれば人が動いてくれると思う。着地型のコンテンツは行ったときに感動できるので、丁寧な情報整理が必要だ。

●関口委員

県外から秋田に来てもらう政策に偏っているが、まず秋田県民にいかに秋田県を楽しんでもらえるかが大切であり、文化による地域の元気創出を念頭に置いた、県民に対する政策によって誘客につながるのではないか。そのためには、面白い企画を立ち上げることが必要である。例えば、「田沢湖歌の輪プロジェクト」というタイトルで、２０キ

ロある田沢湖で輪になって歌を歌うのはどうか。歌う人だけでなく、田沢湖の真ん中で聞くなどいろいろな楽しみ方につながる。

●渡邉部会長
　はとバスで人気のツアーが、懐メロをみんなで歌うツアーである。きっかけによってメディアが発信し広がる可能性があるのではないか。
　それでは、「提言４　ジュニア期からの重点的な強化と本県ならではのスポーツの振興」について議論していく。
　部会の中でもたくさんの意見いただいているが、健康面の取り組みについて多く意見を頂戴したい。

●関口委員
　この夏、金足農業高校野球部の甲子園大会での活躍は、秋田県におけるスポーツの取組をＰＲできたのではないか。新聞にも掲載されていたが、県の支援もあり、スポーツ科学を積極的に採り入れた成果であり、今後も拡充すべきではないか。スポーツ科学を専門とする大学と連携しながら、科学的視点によりデータの蓄積とそのデータに基づいた指導を拡充すべきである。また、田沢湖にあるスポーツセンターの機能拡充も必要ではないか。
　吉田選手の体つきは高校生の枠を超えているように見え、雪国における鍛錬の成果ではないか。冬はボールを使わずに基礎体力作りを行っており、雪を利用した身体作りのメリットを分析し導入してはどうか。

●渡邉部会長
　これまでの高校野球は雪が降る地域は弱いと言われてきたが、今夏の活躍により雪が降ることはメリットだと考えることもできるのではないか。甲子園での注目により秋田ならではのスポーツに対する取り組みが注目されるのではないか。

●佐野委員
　県代表校が夏の甲子園大会の初戦で１３連敗したのを受けて、科学的な指導法に基づく指導の向上などの取り組みを、８年間の長期にわたり計画的に行った成果が、３年前の秋田商業高校のベスト８や今回の金足農業高校の活躍につながっているのではないか。野球のプロジェクトの今後のあり方や、秋田県はここをやるんだという所を、まず確立する必要がある。関口委員の発言のように、スポーツ科学の見地やスポーツドクター、アスレチックトレーナーなどのサポートスタッフが総力を挙げて取り組む仕組みを作ることが重要である。スポーツ科学に関して秋田県内の人材や機関だけでは限りがあるとすれば、全国トップレベルの機関と連携し取組んでいくことが必要であるのではないか。高校野球プロジェクトの場合も、県外の高校野球監督で結果を出した人をアドバイザーとして招いたことが成功につながったのではないか。様々な形で秋田県に関わった専門家が、秋田に関わることで秋田のファンになり、応援する人が増えていくことに

つながるのではないか。

□飯坂スポーツ振興課参事

金足農業高校野球部の活躍の背景にある、高校野球強化プロジェクトは、教育庁保健体育課が中心となって８年前から行っており、スポーツ振興課はスポーツ科学の部分やプロジェクト委員、ワーキンググループのメンバー等として協力している。このようなプロジェクトは、１、２年で終わってしまう場合が多いが、今回のプロジェクトは長い期間をかけて取り組んでおり、他県でもあまりないケースである。また、投球動作の解析や、スポーツ医科学の取組は、専門家と県スポーツ科学センターが連携して行った。県外のアドバイザーからは、秋田のやり方は間違ってないと御意見をもらっている。なお、スポーツ医科学については、平成１９年の秋田国体に向けて積極的に導入しており、すでに２０年以上の実績がある。他機関との連携としては、国立スポーツ科学センターや仙台大学と連携し、協力を得ている。今後、雪国におけるトレーニング効果について検証をしていきたい。

●渡邉部会長

ジュニア強化の一つの要素として、プロセスも大切であるが、ビジョンを持つことが大切である。あの選手に憧れる、あのステージに立ちたいというような具体的なビジョンを持たせることが大事だ。近年は、東京オリンピックを目指してビジョンが可視化される中で日々のトレーニングに対するモチベーションが変わってくるのではないか。

私は以前、フットサルの大会を主催した際に、決勝を国立競技場にしようと考えていた。わかりやすいゴールを作ることで、よりビジョンが明確化されるのではないか。さらに、本物に触れる機会を作ることが大切である。選手だけでなく、指導者も同じであるから本物に触れる機会を増やしていただきたい。

それでは、「提言５　交流や生活を支える道路ネットワークの整備と道の駅の魅力向上」についてご意見を頂戴する。

●佐野委員

次の「提言６－３　過疎地域における地域交通ネットワークの維持」については、地域の実情や住民ニーズにきめ細かく対応した地域交通ネットワークの維持・形成を、市町村と連携して進めていくこと、の所は、どちらかというと、提言５の方に入ってくるのではないか。

□高橋交通政策課長

提言５はハードの整備であり、提言６はソフト的な部分と分けているため、提言６にいれている。

●佐野委員

交通ネットワークの広域な項目の中に、地域交通の住民に係る内容が混ざっているの

で違和感を感じる。

□事務局
　もともとの提言は、「１と２」だったが、「３」が追加されたことにより、タイトルと内容が合わなくなってしまった。事務局で再度検討し修正することでよいか。

●委員一同
　異議なし

●関口委員
　冬の除雪については、作業のレベルがエリアによってばらつきがあると感じる。エリアによっては、ひどい状況で走行が厳しいという話を聞くが、どのような基準で行っているか。

□田森道路課政策監
　除雪は、道路管理者が行っている。河川国道事務局が国道を、県は３桁国道と県道を、市町村道は管轄する各市町村が除雪を行っている。県では、８つの地域振興局があり、同じ基準で実施し、同レベルのサービスを心掛けている。

●渡邉部会長
　観光交流のための道路のあり方と、住民生活のための道路のあり方と分けて考える必要があるので書き方を検討していただきたい。
　道の駅について観光情報誌等が特集を組んでいるのをよく見かける。道の駅が流行しているところは直売所が強いので地元の利用者が多い傾向にある。観光向けにするためには、道の駅をグルメや遊びの観光要素の強い場所にしたい。そうすれば周知される。道の駅が目的化されていくともっとよい。
　それでは「提言６　国内外からの誘客拡大を目指した航空ネットワークの拡充」についてご意見を頂戴する。

●佐野委員
　県内には総合病院までの距離が３０キロ以上ある地域もあると書いてあるが、これから医療がどのように変わっていくかという視点がないのではないか。総合病院だけではなく、地域にある開業医が日常のケアを担っていくという視点が抜けていると感じる。今後、遠隔診療が出てきたときに、タブレット画面等でドクターとやり取りして何ヶ月に一回程度診察を受ける時代になる可能性がある。これからの技術の進展、未来の視点を意識していくことが必要である。ネットワークを支える仕組みづくりの所は、公助に頼るのではなく、ネットワークの構築、住民同士で助け合うという互助という考えが必要であり、地域コミュニティーを支える原動力につながるのではないか。

●関口委員
　インバウンド誘客を拡大するため、仙台空港等の基幹空港からバスを出すことに補助を出しているようだが、それによって県内への来県者数は増えているのか。

□益子インバウンド統括監
　東北地方に訪れている外国人の５０％は台湾人である。多くは、仙台から入国しており、団体ツアーの場合が多い。秋田空港でも、ニュースで取り上げられているようにチャーター便が運航しているが、年間を通じて、仙台から入国する観光客が、秋田を訪れている。花巻空港はＬＣＣが就航しているが、団体客が大半を占めている。仙台空港から秋田へのアクセスを考えたときに、新幹線か高速バスを利用することになる。一方で、仙台、山形間は１時間に何本もバスが走っている状況であり、利便性でいえば本県は厳しい状況である。
　県では、チャーター便の誘致をしつつも、東北の空港を利用する観光客を誘致する取組を行っている。

●関口委員
　観光客の団体から個人旅行への移行事例はあるのか。

□益子インバウンド統括監
　ＪＲからの情報によると、外国人の個人利用は増えている。平日の角館駅や田沢湖駅では、日本人よりも外国人の方が多い日もある。

●渡邉部会長
　国内外のＬＣＣ誘致について考えた時、隣県がライバルになる。そこでで遠隔地連携を進めて行くのはどうか。例として、岡山県はフルーツ王国と言われているので、秋田のフルーツのスケジュールと組み合わせることで年間でいろいろなことを楽しむことにつながり、楽しみが増えるのではないか。あるコンテンツで遠隔地連携をすると、新たな観光周遊につながる可能性がある。まだ「点」で呼んでいるのではないか。
　東北地方では、四季がはっきりしていることが売りになっているが、それがどこかについては定まっていない。そこで、冬は蔵王ではなくて、「横手のかまくら」に来てもらえるように売り込めば、四季折々の観光を打ち出すことになるのではないか。
　先日、インターンシップで来秋している留学生に「秋田犬よりもハチ公のふるさとと呼んだほうが良いのではないか」という意見をもらった。メジャーになっているが、ハチ公のふるさとの方がより強いインパクトがある。
　「１」については、アウトバウンドはぜひ進めてもらいたい。パスポートの所持率を向上していただきたい。東北地方は、人のつながりで訪れることが多いので、若い人が海外に行き日本や秋田の良さを広めてもらいたい。
　それでは、全体を通して意見があればお願いする。

●関口委員
　人口減の秋田県において、冬の除雪作業を手動ではなく、ＡＩを導入して自動運転で行うことはできないか。降雪量によって自動で出動し、住民が朝起きる前には除雪が完了しているという取組ができないか。

□田森道路課政策監
　現状では、降雪量を見て、出動有無の判断を除雪担当者が行っている。今のところＡＩによる除雪は検討していない。

●佐野委員
　除雪に関連しては、時間や作業ではなく、成し遂げたことに対しての評価に変わって行く必要があるのではないか。減点方式ではなく、良い除雪業者は評価し、インセンティブを付与する。例えば、優良除雪に対してのチャンピオンを決める取組は、励みになり、全体のレベルアップにつながるのではないか。これは医療の世界でも、例えば薬を使った出来高に対して支払うのではなく、デイサービスに通ったことでどれだけ回復につながったかという点について評価することに変化してきている。
　移住・定住に関することで、地域を詳しく分析すると新たな仕事を作ることにつながる。全国平均をもとに、その地域を分析し、不足している商売があれば仕事になる可能性がある。

●関口委員
　仕事が忙しい４０代、５０代の男性や２０代の女性のスポーツ参加率が低い。県庁では１５時ごろに体操をしていたと記憶しているが、今でも継続しているか。

□嘉藤次長
　休憩時間が無くなったため、現在は行っていない。

●関口委員
　少子化の要因の一つとして、座りっぱなしで業務していることが考えられる。正しい知識や情報を発信し、座りっぱなしを改善するには、体を動かすための環境作りが必要である。

●渡邊委員
　人・もの交流拡大部会はとても重要で停滞させてはいけない内容を扱っていると感じる。いきなり移住をすることは難しいが、入り口として観光や交流があると考える。６つの提言はとても広いうえ、各方面に波及することからまとめていくのは大変であるが、過疎化が進む最重要課題県である秋田の取組が、今後多方面に影響を与える。
　本日の議事は以上とする。
　進行を事務局にお返しする。

□事務局

長時間にわたり熱心なご審議に感謝申し上げる。

これをもって第３回人・もの交流拡大部会を閉会とする。

以上